

今回は、ケニアに暮らす農村の人々の普通の暮らしを紹介したい。都市を除く人口の70%は農業に従事しており農業国といえる。かつてタンザニアの大統領であったニエシは、「世界が宇宙を目指す中、私たちは農村を目指すべきだ」と言ったことがあった。農業で生きていく経済というのはどういうものかを実感したのはケニアの農村を訪ねるようになってからだ。

OTHAYA(“オザヤ”)という農村がある。ケニアの首都ナイロビから車で2時間ほど北上したところがあり、紅茶の産地として有名な所だ。近年は、3年前に代わった新大統領の出身地としても有名だ。3年程前、ほんの数日の滞在であったがこの地を私は訪ねた。外国人が訪ねてくることもない、観光するところもないケニアの農村。ケニアの最大部族であるキクユ族しかいないこの村に着いたときから、キクユ語のラジオ、音楽、服装、食べ物しかないことに気がついた。車でたった2時間の場所のここでは、もうナイロビのように英語やスワヒリ語が聞こえてくることもなく、世界のさまざまなレストランが軒を連ねていることもなく、単一民族による単一の文化が生きていた。急に、より一層外国人になったような気になる。自分の言葉をわかってくれる人がいなくなったような気がした。とある一家に泊めてもらうことになっていた。

バスターミナルからその家までは、歩くと1時間の道のりであるが、乗り合いタクシーを利用することにした。タクシーといっても、普通のバンタイプの乗用車である。出発は、車が満員になったらということでひたすら待つ。しかし、1時間以上たっても人が集まらない。集まってくるのは、荷物なのだ。そして荷物

で車がいっぱいになって出発する。車の客は、袋に入ったじゃがいも、足を縛られている数羽の鶏、その他マットレスなどの日用品、そして私。荷物は、それぞれの家の前で降ろされていく。荷主を車が抜かしていくこともある。人は歩くのが基本なのだろうか、みんな何時間もかけて歩いて帰るようだ。2時間たってようやく家に着いた。こんなに待つなら歩いて良かったかな、いや歩いたほうが早いと思いつつながら。



牛にやる草を刈る



紅茶畑にて

5人家族のお父さんお母さん、子供たち3人が迎えてくれる。両親は英語が話せると分かり少しほっとした。子供たちはキクユ語がメインで、普段はあまり使わないスワヒリ語、学校で習う英語を話すことには戸惑っているようだった。ナイロビの子供たちのように3つの言語を幼い時から使い分けているのとは違う。

早速、皆でお昼ご飯の準備をする。家の裏にある畑から野菜を採ってくる。ジャガイモ、キャベツ、ニンジン、タマネギ、トマトなどを食べる分だけ採る。子供たちとそれらを洗って、切っている間にお父さんが大きな丸太を切り分けて薪を作っている。すべての用意が出来てお母さんが登場。スフリヤと呼ばれる丸い鍋の中に野菜を全部入れて煮る。野菜が柔らかくなるとそこへ米を入れてさらに煮る。野菜の混ぜご飯のようなものだ。そこへ塩を軽くふる。

平日のお昼に家族全員でご飯を作ったことのない私はものすごく贅沢な時間だなと感じた。家族で鍋を囲んでいろんな話をする。ラジオからはキクユの音楽。それ以外は鳥の鳴き声。紅茶を育てる高原地域の生暖かい風が吹きぬけている。よく笑うお母さん。よくしゃべる子供たち。それを優しい目で見て

いるお父さん。ご飯が炊き上がる。5人分にしては大きすぎる鍋だなと思っていたが、その理由は後からやってくる近所の人たちの分らしい。簡単なお祈りをしてから頂く。その優しい素朴な味は、今まで味わったことのない味だった。野菜は野菜の味がする。

午後は、牛にあげるネピアという草を刈る。草刈りの後は、乳搾りをする。ケニアでは、牛は、時に結婚の結納品であり、お母さんの牛もそうだったということで、すごく大切に世話をしていた。飼ってるウサギや鶏にえさをやり、家の掃除をする。その後、搾りたてのミルクで、熱いミルクティーを作ってくれた。

“ハランベ”という文化がある。スワヒリ語で“助け合い”というような意味だ。冠婚葬祭や困ったときに互いが助け合うという制度である。この日は、とある家庭の子どもが高校で学ぶ費用をみんなで少しずつ出し合うというハランベの集まりがあるという。お母さんと出掛けた。お母さんは、日本円にして100円ほどを封筒に入れ、ハランベの主催者のお母さんに渡す。食事やお茶が振舞われ、祈り、歌い、踊る。そして、おしゃべりを楽しみ帰る。総勢30名くらいの参加で、一学期間の学費は賄える計算だ。そうやって学校へ子供を地域ぐるみで支えて通わせることも出来る。病気の治療費、海外の大学に行く費用、お葬式の費用等急な出費があるときはこのハランベを利用することが多いそうだ。もちろん自分が協力出来る範囲のお金や物でよい。

農村では日常的な暮らしには困らないが、貨幣にあまり頼らなくてすむ社会なので、冠婚葬祭や学費、医療費という急で多額なお金を必要とする際は困ってしまうのである。こうして助け合う姿に「農村では一人では生きていけないよ」という言葉に納得できる。

その後、家に帰って洗濯を始める。子供達が汲んできてくれた水で一枚一枚手洗いしていく。大きなバケツに服と水を入れ、石鹸で擦る。あっという間に腰が痛くなる。横にいるお母さんは、歌を歌いつつ余裕の顔でてきぱきと洗っている。洗い終わった服は、子供たちがロープに干してくれた。明日のお昼には乾いているだろうとのこと。2時間ほど洗い続けた。

日も暮れ始める時間。夕食の準備をする。お客で



台所



子ども達

ある私のために鶏をプレゼントしてくれるとのこと。早速鶏小屋にいた一羽が、首を落とされてキッチンへとやってきた。それを熱湯につけて羽を落とす。お母さんが包丁を使って解体していく。トマトと油で炒め、水を加えて2時間ほど煮た。鍋を囲んで、家族が集まっていろいろな話が始まる。出来たスープに少し塩を加える。お皿に鶏肉が盛られ、コップにスープを注がれる。白いご飯も用意されていた。何一つ複雑な味付けはない。しかし、その鶏肉とスープの味は、細胞に染み渡るように美味しかった。まるで一日の労働に対してのご褒美のように感じられた。

遅くまでいろいろな話をした。外に出ると電気がどこにも見当たらない漆黒の闇だ。動物の鳴く声や草木が風にそよぐ音以外は何もしない。まるでこの家族だけ取り残されたような孤独感。そんな環境で、家の中の暖かさがすごく幸せなものに感じられる。お父さんがいて、お母さんがいて、子供たちがいて、美味しい食べ物がすぐそばにあって。毎日、繰り返される生活のための家事や労働。「毎日しんどくないのか」と聞いてみた私に、「明日が来るのが楽しみ」というお母さん。便利な暮らしを経験したことのない彼女は、当たり前のこととして、幸せなこととし

てここで暮らしている。幸せとは、それを感じる心なのだとしみじみ思った。少なくとも、ケニアの農村にいるこの家族は幸せだと実感した。

次の朝、早く起きて紅茶葉を摘むのを手伝った。大きな籠を背中に背負って、狭い茶畑に入って摘んでいく。背中にずっしり重みを感じつつ、早朝に摘んで工場行きのトラックに載せないといけないということで急いで摘んでいく。そして、同じ一日がまた始まっていく。幸せを知る豊かな生活がまた始まっていく。